

第8回白壁賞は吉田操氏らが、 第27回村上記念「胃と腸」賞は 渡辺英伸氏ら、松本主之氏ら が受賞

2002年9月18日(水)、東商ホールで行われた早期胃癌研究会の席上、第8回白壁賞と第27回村上記念「胃と腸」賞の授賞式が行われた。第8回白壁賞は吉田操・他「食道癌の深達度診断—内視鏡像からみた深達度診断」(胃と腸 36: 295-306, 2001)、第27回村上記念「胃と腸」賞は渡辺英伸・他「虫垂・盲腸 Crohn 病の病理学的特徴と鑑別診断」(胃と腸 36: 183-194, 2001)と松本主之・他「潰瘍性大腸炎診断基準の問題点—非連続性病変の面から」(胃と腸 36: 507-515, 2001)に贈られた。渡辺氏は第7回の「胃と腸」賞を「原発性の空・回腸腫瘍の病理—肉眼形態と組織像の対比」で受賞しており、2度目の受賞となった。

研究会司会の川口実氏(国際医療福祉大学附属熱海病院内科)から、まず白壁賞受賞者の発表があり、受賞者代表として吉田氏(都立駒込病院、現: 都立墨東病院)が紹介された。本賞は、故白壁彦夫氏のご業績をたたえて、消化管の形態・診断学の進歩と普及に寄与した論文に贈られるもので、「胃と腸」に掲載された論文に加え、応募論文も選考の対象となる。今回は「胃と腸」36巻に掲載された全論文と応募のあった英文論文1篇が選考対象となった。

選考委員会を代表して横山善文氏(名古屋市立大学第1内科)が、選考委員会で慎重に審査が行われ候補論文が絞られた後、全編集委員による厳正な投票によって受賞論文が決定したと選考経過を報告し、“吉田先生の永年にわたる食道癌診断学の集大成というべき論文である”と述べた。

続いて、編集委員会代表の八尾恒良氏(福岡大学筑紫病院消化器科)から賞状と盾が贈られた。金原優医学書院社長からは副賞として賞金50万円が贈呈された。

受賞者を代表して吉田氏は、“この仕事は20年ぐらい前から続けてきた仕事で、駒込病院の食道グループだけでなく、小池盛雄先生(東京医科歯科大学病因・病理)、滝澤登一郎先生(東京医科歯科大学病理診断科学)に病理の面でバックアップを受けた。食道癌の早期診断を勉強するグループの中でも海上雅光先生(わたり病院病理)、板橋正幸先生(茨城県立中央病院病理)に長年指導を受け



▲第8回白壁賞を受賞した吉田操氏。



▲満員となった早期胃癌研究会会場(東商ホール)。

たし、多くの仲間の代表として賞をいただいたということで大変うれしい。食道癌の診断学は遅れていて、私が食道の世界に入ったときには、一番早い時期の癌がsm3くらいの癌で、治療しても再発する方が多く、早期癌という概念からは遠かった。内視鏡で一生懸命仕事をして、粘膜内癌の診断ができるようになり食道癌の早期診断がなんとか完成できた。白壁先生が認めてくださり「胃と腸」の編集委員になったが、今日の賞をいただき、食道癌の診断学も消化管診断学の中に存在を認められたとしみじみ感じる。永年やってきたことがひとつの形になったということで大変うれしい。これからも食道領域の診断学、治療学に対してご支援を賜りたい。ありがとうございました”と述べ、満場の拍手を受けた。



▲第27回村上記念「胃と腸」賞を受賞した渡辺英伸氏。



▲第27回村上記念「胃と腸」賞を受賞した松本主之氏。

続いて、第27回村上記念「胃と腸」賞の受賞者が発表され、渡辺氏(新潟大学分子・診断病理)と松本氏(九州大学光学医療診療部)が紹介された。選考小委員を代表して横山氏は、編集委員会での投票の結果2本が選ばれたことを説明し“従来 Crohn 病に関して虫垂はあまり注目されていなかった領域だが、渡辺先生の論文は虫垂の Crohn 病も小腸あるいは大腸の病変と変わらないということを明らかにした。松本先生の論文は、潰瘍性大腸炎は従来、直腸から連続性にびまん性に広がるということが定義だが、たくさんの症例を集めて決して非連続性の病変がまれではないということを明確にした”と受賞理由と祝辞を述べた。

続いて、八尾氏からは賞状と盾が、金原社長からは賞金50万円が渡辺先生、松本先生それぞれに贈呈された。

受賞者を代表して渡辺氏は“1978年に初めて Crohn 病の論文を「胃と腸」に書き、既に診断基準を八尾恒良先生と一緒に確立したが、盲腸の Crohn 病があまり再発をしないことを、ずっと疑問に思っていた。22年間、早期胃癌研究会でもいろいろな症例を見せていただきながら、その思いを頭に入れていたのでこの会でアイデアを醸造させることができた。実際には、虫垂から延びた病変が盲腸の虫垂開口部に出ることががだいたいわかった。でもこの疾患がやはり再発が少なく、全身性の縦走潰瘍に進展していくのが少ないのはなぜか、まだ

疑問がいっぱいある。いろいろ夢がある。1つの仕事を終えたら若い方もおそらく2つか3つ疑問が残ると思う。そういう疑問をいつもつくりながら論文を書いていくことは大変楽しいと思う。私の思い出の一環を述べて感謝に代えたい。ありがとうございました”と述べ、会場から盛大な拍手を受けた。

続いて松本氏は“「胃と腸」に論文を書くことは緊張感があるが満足していた。さらに榮譽ある賞をいただいて感謝している。私が今回まとめたのは潰瘍性大腸炎の非連続性病変だが、振り返れば1994年、旭川医科大学第3内科の斉藤裕輔先生が内視鏡学会雑誌に報告されているものに感銘を受けた。それから症例を蓄積して、非連続性病変のほうが多いということが証明できたかなと思う。最近、炎症性腸疾患の世界では、新しい治療とか分子生物学的な病態解明とか言われているが、結局は土台となるのは臨床診断であって、今回この仕事をさせていただいて本当に臨床診断の難しさ、重要性をよく勉強させていただいた。共同研究者である諸先生には本当に感謝したい。九州大学形態機能病理の八尾隆史先生には病理の解析は全面的にお世話になった。終始ご指導いただいた九州大学病態機能内科の飯田三雄先生にも深謝したい。本日は本当にありがとうございました”と述べ、会場から盛大な拍手を受けた。